

永遠の季節

そうやってまた秋が来て
ひとりきりのように立ちつくしても
何も知らなかった頃のように
虚しく泣いたりはしない

冷たい欄干に手を置いて
燃え上がる夕陽と向き合った
往きて帰らぬ日々の背を
いつか見た星が追いかける

優しい面影は
追うほどに薄れて
その時々
涙は零れるけれど
忘れはしない
一度は出逢えたことを

目を細めて
遥かな道を確かめたら
またゆつくりと歩き出す
離れたままで繰り返し返す
美しくも切ない季節を
僕らは生きる